

【下関市総合教育会議議事録】

令和4年度第2回下関市総合教育会議

開催日時	令和4年11月14日（月） 15:00～16:30
開催場所	教育センター 3階 大研修室
出席委員の氏名	前田 晋太郎（市長） 児玉 典彦（教育長） 小田 耕一（教育長職務代理者） 藤井 悦子（教育委員） 吉村 邦彦（教育委員） 佐々木 猛（教育委員）
欠席委員の氏名	欠席なし
委員、関係者及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名	総合政策部長 前田 一城 教育部長 徳王丸 俊昭 教育部次長 八角 誠 教育部次長 吉川 弘文 学校教育専門監 木下 満明 教育政策課長 内田 泰敬 学校教育課長 岡田 達生 教育指導監（生徒指導推進室長）中尾 琢磨 教育研修課長 浦野 建太 学校支援課長 平本 万佐生 教育部参事（生涯学習課長） 藤井 智 中央図書館長 江原 理恵 教育研修課主査 戸嶋 優子 教育政策課長補佐 倉前 啓介 教育政策課主任 吉富 守夫
傍聴人の数	傍聴なし

次第（目次）

【開会の宣告】	P 3
【市長挨拶】	P 3
【教育長挨拶】	P 3
【協議・調整事項】	
(1) 「読書の街下関」	P 3
【その他】	P 1 5
【閉会の宣告】	P 1 8

【開会の宣告】

徳王丸俊昭（教育部長）

ただいまから、令和4年度第2回下関市総合教育会議を開催いたします。
まず初めに、総合教育会議の主催者であります、前田市長に開会の挨拶をお願いいたします。

【市長挨拶】

前田晋太郎（市長）

皆さんお疲れ様でございます。第2回になります下関市総合教育会議にご参集いただき、ありがとうございます。皆様には平素から下関市教育行政に大変お力添えいただき、心より感謝申し上げます。先に行われました「日本遺産フェスティバル in 関門」は3年前ぐらいから誘致の話をお願い準備してきましたが、去年は全国大会が石川県の小松市であって非常に風光明媚な街で、私も翌年度開催主催者になるのでご挨拶に行ってきたのですが今年よりコロナがまだ厳しい感じだったんですけど、非常にうまく流れを受け継ぐことができ、よかったなど。準備結構大変だったと思うんですけど教育委員会の皆さん本当にお疲れ様でした。頑張っていたいただいて感謝申し上げます。

さて、今日の協議事項は「読書の街・下関」でございます。

読書をするとは言うまでもないですが、国語力、語彙力の向上につながります。様々な思考を言語化することで、考える力が身に付き課題を解決する力へとつながります。子供たちにとって本を読んでもらうことはとても重要なこととなります。新型コロナウイルス感染症の影響により社会は大きく変化しましたが、読書の力によって対応力を身に付けた子供たちが新しい時代を切り開いていくと信じています。そのためにも実りのある協議をしたいと思っておりますので本日はどうぞよろしくお願いたします。

徳王丸俊昭（教育部長）

前田市長、どうもありがとうございました。続きまして、教育委員会を代表して、児玉教育長にご挨拶をお願いいたします。

【教育長挨拶】

児玉典彦（教育長）

教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日の協議・調整事項は「読書の街・下関」です。

読書の街・下関は学びの街・下関を受けて掲げるものです。もともと学びの街・下関は市長が掲げる希望の街・下関を受けての言葉ですので、全て希望の街につながっていくのかなと思っています。自分の希望や夢というのは学び続けるとことで成長した未来の自分です。そういう未来の自分をつくるために、学ぶ力、そのベースとなる読書はとても重要です。ぜひ下関市としても読書活動の推進に取り組んでまいりたいと考えています。ぜひ今日は活発な意見が出ることを期待しています。

ここまで下関市の教育行政は、前田市長の格別なご理解とご協力により停滞することなく継続しております。さらにもう一つ下関教育の基礎になる部活動の取組が生まれればと思っております。前田市長におかれましては引き続きよろしくお願いたします。

徳王丸俊昭（教育部長）

ありがとうございました。それでは協議・調整事項に入らせていただきます。

これより、議事の進行は前田市長をお願いいたします。

【協議・調整事項】

「読書の街・下関」

前田晋太郎（市長）

よろしくお願いたします。読書の街・下関であります。本の好きな子供、学びの好きな子供を育てるために様々な取組を行ってまいりましたが、その重要な役割を果たすのが学校司書ですね。私たちが子供の時はなかったように記憶しています。私が市長に就任した平成29年。最初の補正予算で0人を1

0人にいたしまして、ただ小学校、中学校で10人だけでした。当時はどれくらいあったかな、小学校は44、45校ですかね。中学校は20校ちょっとですかね。どうしても谷になってしまう学校ができてしまうわけですよ。3年ぐらいたった時にそれが入れ替わって、今まで司書が来ていた学校が司書が来なくなってしまおうと、時間が足りなくなって、その負担が親にいくわけですね。その時にいろいろな声が入ってきまして、想像はしていたんだけどやはり10人では難しいなど。ボランティアの方を地域から声をかけて来てもらってとかいろいろやりましたが、もう10人増やそうということで踏み切りまして、結構これ人件費かかるんですけど、1人二百数十万円だから二千数百万円。毎年二千数百万円を一般会計に計上するというのは、私がいいよって言ったって財政課は反対しますから。これを説得するのに時間がかかりましたけど、何とか教育委員会の熱意もあって20人に増やすことができました。これは非常に議員さんからも地域の保護者からもお褒めの言葉というか、いただきまして、やっとスタートラインを切ったかなという感じですね。こういう地域間の平等性の確保の対応も終わりましたから、しっかりとこれから本を読む環境整備をさらにギアアップしてやっていかないといけないなというふうに思います。移動図書館車のブックルですね。とても可愛いデザイン、あれは下関の女性デザイナーが描いてくれたんだけど、とてもいいのができまして、いよいよ本を読む習慣って大切だよってという意識が広がりつつあるのを感じています。だから我々としてもしっかり取組を進めていきたいなと思います。生活の中に本に親しむ環境を組み込んで、子どもからお年寄りまで年齢を問わず、読書に親しむ市民性、そして学び続ける市民を増やしていかなければならないということですね。これを皆さんで議論していきたいなと思います。ということで現在の取り組みについて説明をお願いします。

戸嶋優子（教育研修課主査）

失礼します。教育研修課の戸嶋と申します。私の方から学校教育における取組についてご紹介いたします。

まず、学校司書が普段学校で取り組んでいることについてパワーポイントを使用してご紹介いたします。

学校図書館の整備です。棚には少しゆとりを持たせ、ブックエンドを使用しています。机の配置を少し斜めにして、全体を広く見せるよう工夫しています。そのほか、蔵書に付いているほこりを拭き取ったり、カーテンを付け替えたりもしています。図書館内にゆとりをもたせるため、廊下に本棚を配置することもあります。手が届きにくい1番上の棚は掲示用にしてあります。廊下を読書スペースに改造した例です。

蔵書管理も大事な整備の一つです。

こどもの広場さんに協力してもらっての選書会の様子です。子供たちは、体育館に入った瞬間に新しい本が目に入り、わくわくうずうずしています。横山眞佐子さんのブックトークを聞いた後、図書館に入れてほしい本を子供たちが選びます。手に短冊を握りしめているのが見えるのでしょうか。この学校では、1人3本の短冊が渡されていました。読みたい本を3冊選んで短冊をはさむのですが、中には一押しを1冊選んで、3本ともはさむ子供もいます。選書会で多くの子供たちが短冊をはさんだ本を学校が購入します。学校司書がついていなかったときは、1学期に購入した本を、2学期のスタートに合わせて受け入れ作業を行う学校が多かったのですが、今では1～2週間程度で図書館に並べることができるようになりました。早い学校では購入した次の日に貸出可能、というところもあるほどです。子供たちの「読みたい」という思いが熱い状態のときにスピード感をもって提供できるのも、学校司書がいる強みです。

子供に人気の本は、傷むのも早いのですが、修理して大切に読んでいます。

背表紙は力が入る部分なので、最も破れやすいところです。専用のテープを張って直すのですが、何度も補修した形跡があります。背ラベルが色あせて見えにくくなり、新しく張り直しています。タイトルが分かるように新しく張り直しました。ドラえもんらしさは再現できていない状態ですが、大人気のシリーズです。

子供たちが本を探しやすいように大きめの見出しをつけています。

図書館マップが掲示されていると、どこにどんな本があるかすぐ分かります。学校図書館の蔵書は日本十進分類法に従って配架されています。掲示を見ながら、目当ての図書を探します。

続いて、読書活動・読書指導の推進にかかわる取組をご紹介します。

4月のオリエンテーションの様子です。学校司書が国語の授業のゲストティーチャーとして、0類から9類までの図書を30冊程度取り上げながら学校図書館について説明しました。説明の後は、紹介した図書が全て貸し出されていました。

子供からの様々な質問に個別に対応することも大事な役割です。

子供たちの足が図書館に向くよう、各学校で様々な工夫を凝らしています。こちらは、普段はあまり

手に取られていない本の中から、学校司書のおすすめ本を展示しています。給食中の放送で本の紹介を聞いて、飛び込むようにしてやってきました。早く読みたくて頭が痛くなっちゃったと言いながら選んでいます。4月の下関市いのちの日に合わせたコーナーです。各学校で様々なコーナーが設置されています。人権のコーナーも多くの学校で設置されています。これは北朝鮮による拉致問題を扱った掲示です。拉致問題については、小学生向けの蔵書がほとんどないことから、掲示物によって知識を得られるようにという意図でつくられたものです。このように、図書以外の学習教材を用いて学校図書館を充実させる例も多くあります。

新聞についても、できるだけ子供たちの興味を引こうと、切り抜いたり情報ごとに整理したりと学校司書が工夫して掲示しています。ロシアとウクライナを取り上げた掲示物は多くの学校で用意されました。

ブックトークや読み聞かせは頻繁に行っています。これは、中学生と地域の方との合同読書会です。昼休みの短い時間に完結するよう、学校司書が奮闘しました。

これはたまたま撮れた、大盛況だった図書館の様子です。御覧ください。

秋になると、多くの学校で図書館祭りが開催されます。この図書館では、おすすめの本についてポップを作成したら、ガチャガチャを引くことができ、景品をもらえるという内容です。景品は学校司書やボランティアによる手作り品です。本のカバーを利用したバッグを子供が選んでいます。これがポップの書き方です。図書委員中心となって運営をしておりました。皆、本を借りていました。

次にガチャガチャなんですけど、結構図書館にガチャガチャが設置されていますが、使い道としては、ガチャガチャの中におすすめの本が書いてあり、子供たちがその本を借りていきます。学校司書による選書で偶然手にする本なんですけど、読み終わると面白かったという感想が多く届くようです。

右側の動画をご覧ください。ハンドルを回すと勢いよく出てきます。大量のカプセルも、学校司書が集めたと聞いております。

本のおたのしみ袋の取組です。これも偶然性といいますか中の見えない袋にテーマを張り、中にはそのテーマに沿った本が入っています。

こちらは本選びにつながるチャートの掲示です。

YES、NO と答えながら、タイプの診断を受けるというものなんですけど、前田市長さん診断してもよろしいでしょうか。

前田晋太郎（市長）

どうぞ。大丈夫です。

戸嶋優子（教育研修課主査）

質問しますので、YES、NO でお答えください。

体を動かすのが好きだ。

前田晋太郎（市長）

YES。

戸嶋優子（教育研修課主査）

ドキドキを求めている。

前田晋太郎（市長）

YES。

戸嶋優子（教育研修課主査）

人より騙されやすい。

前田晋太郎（市長）

これはYESと言いたいけど、皆が心配するのでNOにしておこう。

戸嶋優子（教育研修課主査）

これも答えにくいですかね。日々いろいろな人に怒られている。

前田晋太郎（市長）

NO。

戸嶋優子（教育研修課主査）
ジェットコースターが好き。

前田晋太郎（市長）
大好き。

戸嶋優子（教育研修課主査）
テンションを上げたい。

前田晋太郎（市長）
上げたい。

戸嶋優子（教育研修課主査）
タイプ B はですね、「絶望と疲れに効く本」がおすすめと学校司書や図書委員がこれをどうぞと。

前田晋太郎（市長）
ぴったりかもしれない。おもしろい。

戸嶋優子（教育研修課主査）
これは、ビブリオバトルという読書会の紹介です。ビブリオバトルとは参加者が互いに本の紹介をして、最後に一番読みたい本を投票するバトルゲームです。ルールを図書館内に掲示することで、先生方が誰でも実施することができるようになりました。

学校司書や教員だけでなく、子供が共に行う読書活動は、大きな推進力があります。夏場、図書館が暑いときに、移動図書館の仕組みをまねて教室へ本を運ぶ委員会活動です。低学年の子が喜んで、一緒に校内を歩いています。中央図書館の「ブックル」と学校名の「むかい」を合わせて「むかいっくる」と名付けられました。

図書委員のおすすめ本は多くの学校で掲示しています。定期的に入れ替えることで、来館者を増やすことにつながっています。学校司書による図書館だよりの作成も増えてきました。

授業に合わせて教室の前に関連本を並べています。授業で興味をもったタイミングですぐ手に取れるので、多くの子供たちが読んでいます。学校図書館にない場合は、公立図書館から借りています。

昨年度末、科学道100冊ジュニアという図書のセットを理化学研究所から寄贈してもらいました。自然科学への探究心へとつながることを願い、4月から順次小学校へ貸し出しています。その図書すべてにブックコートをかけ、このようにラベリングしてくれたのは、中央図書館の職員の皆様です。さらに、小学校43校へ貸し出す計画を伝えたら、運搬のほとんどを請け負ってくれました。そのおかげで、来年2月までに、全ての小学校で子供たちに紹介できます。ある小学校では、この図書が届いたその日のうちに学校司書がコーナーを設置し、校長先生がホームページと校長だよりで宣伝してくださいました。

以上のような学校司書の取組は、今までにも行われていましたが、今年度から全ての小・中学校で行える環境が整いました。1年目より2年目、3年目とさらに充実させていきたいと考えています。

続きまして、教育委員会としての取組をご紹介します。

マニュアルを作成して、学校と学校司書とに配付しています。日々の業務について具体的な説明を掲載しています。

また、学校司書全員が集まる研修を年間5回実施しています。写真は6月の研修の様子です。小・中学校の教諭各校1名、学校司書、ボランティア、さらに豊北図書室の職員が参加し、学校図書館を活用した探究学習について講義・演習を受けました。

9月26日、中央図書館との合同研修の様子です。学校司書と公立図書館司書計40名で、「読み聞かせの準備と技法」という講義と演習を受けました。講義の後、地域毎のグループに分かれて情報交換の時間を取り、顔を合わせた研修の場ともなりました。

研修会の一つとして、ブロック別研修という少人数による研修を実施しています。4人が1グループとなり、それぞれの勤務校を会場とし、研修テーマも持ち寄りで決めています。各グループ年間10回程度実施する予定です。写真は、読み聞かせの練習をしているところ、新刊本の受け入れを協力して行っているところです。中央図書館をお借りして研修会を開くこともあります。

それでは、成果と課題についてご説明します。

下関市では、平成27年に5人の学校司書を配置し、11校での勤務を開始しました。その後、平成30年に10人に増員し、市内の半分の学校に配置することとなりました。グラフをご覧ください。配

置された小学校22校の数値です。配置前の平成29年度と3年後の令和2年度末の貸出冊数を比較すると、およそ1.3倍となっています。中学校では、2倍以上になりました。

令和3年度は、それまで配置していなかったもう半分の学校に学校司書を配置しました。わずかではありますが、1年間で小・中学校ともに増加していることが分かります。

他にも、学校司書が配置されたことで、「図書館の利用者が増えた」「授業で図書館を使うことが増えた」という学校からの声を多く聞くようになりました。

同時に、小学校と中学校の貸出冊数を比べると、中学校での更なる利用推進を図りたいと考えますし、学校司書もその思いを強くしています。そのためには、教科の学習で学校図書館を使う場面を多くし、教員を通じた図書館の利活用が増えていくことが大切です。教員を十分に支援するために、学校司書の資質向上も今後の課題と受け止めています。

子供たちの「読書って楽しい」「本を使って調べると面白い」「図書館に行きたい」という思いを育み、生涯にわたって読書に親しもうとする態度が養われることを目指し、学校司書とともに取り組んでいきたいと考えます。

読書が好きな子供を育てることが読書の街、そして学びの街に結びつくと信じ、今後も取り組んでまいります。

御清聴ありがとうございました。

前田晋太郎（市長）

とても良いプレゼンだったと思います。司書もあんなに数字が変わるんだったら早く増やしてあげればよかったなと思いますし、うらやましいというか、我々の時代からすると佐々木さん、図書室って開けたら誰もいないし、あんな華やかな場面はないですよ。なかったですよ昔は。あんな特集とか。驚いたのはウクライナ情勢とか時代のトピックスに応じた、人権のこととか、難しいような話でもきちんと伝えようとしてるし、推進する姿勢がとても良いなと思いました。次は中央図書館から図書館の取組について説明をお願いします。

江原理恵（中央図書館長）

中央図書館です。よろしくお願いします。

「図書館における取組について」説明します。

下関市立図書館では、利用者の皆様に利用していただくために、貸出、返却及びレファレンスのサービスはもとより、手に取りやすいような書籍の整理や団体貸出なども行っております。

ここでは、通常行っている業務とは別に、中央図書館及び各地域館の司書が、本に親しんでいただくためや図書館を知っていただくために行っている、いろいろな講座やイベントについてご紹介させていただきます。

資料ですが、お手元にある「下関市立図書館講座・イベント」をご覧ください。これは令和3年と4年に実施したものの抜粋です。各図書館でそれぞれの企画がありますが、いくつかご紹介いたします。

表右端に資料番号がありまして、次のページにそれぞれの写真も載せています。

資料1は中央図書館で行った「ほんのふくぶくろ」です。テーマに合わせた児童書を、複数冊セットにしてタイトルが見えないように英字新聞でラッピングし、利用者に貸し出します。本の内容については、3歳まで、4歳～6歳、小学1・2年生、3・4年生、5・6年生、中学生、全年齢と7種類に分けています。特に夏休みに行ったときは、好評により全て貸し出され予定より早く終了しました。

今年から大人の福袋も始めました。一般書を分類番号別やフリーの9種類に分けました。こちらもお好評で予定より早く終了し、「自分では手に取らない本が読めて面白かった」や「新しい世界に出会えた」というご意見もいただいています。

資料2も中央図書館が行った「ほっとひといき。えほんたいむ。」です。市役所本庁舎1階にある「親子ふれあい広場」において、未就学児とその保護者を対象とした読み聞かせや絵本の楽しみ方などの講座を開きました。

また、移動図書館車「ブックル」も出動し見学していただいて、親子で楽しんでいただきました。なお、明日15日にも行う予定になっております。

次は、資料展示について中央図書館5階で行っている資料3と資料4をご紹介します。

資料3「なつかしの昭和」です。昭和の時代を懐かしむことができる資料を、期間を決めて年代ごとに展示しています。めくっていただいて、資料4「クジラコーナー」です。昨年度に鯨関係の資料の寄贈が多数あり設置しました。下関とクジラの歴史を知ることのできる充実したコーナーです。

資料5は彦島図書館で行っている「ぬいぐるみのおとまりかい」です。子供から預かったぬいぐるみを図書館にお泊りさせるイベントです。眠っていたぬいぐるみが次々起き出し、誰もいない図書館内を探索したり、読み聞かせや読書を楽しんだり、カウンターで本の貸し出しをするといったものです。

ぬいぐるみが本を借りている様子や、食事や就寝の様子などを写真に撮り、ぬいぐるみが借りた本と一緒に子供にお渡ししているのも、とても喜ばれています。

資料6は豊田図書館が行っている「絵本かるた」です。一般的なかるたのルールで、取り札が絵本になっており、絵本の内容が書かれた読み札により、参加者が該当の絵本を取るものです。始まりは小学生を対象にした開催でしたが、今年度は、未就学児を対象としたものや大人を対象としたものも開催しました。小学校には事前に巡回文庫で図書を貸し出し読書推進活動につながったり、大人はその本にちなんだ思い出話に花が咲くなど大変楽しい時間になったりしています。

資料7は豊浦図書館が行っている「歴史講座」です。歴史博物館学芸員などを迎えて、地元で活躍した人などについての講座を開催しました。熱心に耳を傾けながらメモを取る方や、資料を持って帰り読み返したいという方などいました。

資料8は豊北図書館が行っている「図書のオリジナル帯作り」です。豊北中学校の地域開放講座の一部として、中学生、小学生、地域の方を対象とし、事前に選んでおいてもらった本の帯を作ります。みんな選んだ本への思い入れも深く、熱心に書き込んでいました。出来上がると、実際に本に巻いた状態での写真撮影も行いました。

資料9は移動図書館車による「ブックルが学校に登場！」です。先月吉母小学校を訪問し、ブックルの見学や本の貸し出しを行いました。参加した児童から「見かけたことはあったけど、車の仕組みや中を知ることができて良かった」との感想をいただいております、その直後の吉母公民館への巡回に来て図書カードも作ってくれるなど、子供たちの読書活動の推進につながりました。今月末には、豊浦小学校を訪問予定です。

以上、講座やイベントについてご紹介させていただきました。これらの様子は、図書館のホームページやFacebookで配信しています。1つの館での講座・イベントであったり、コロナによって少人数での開催だったりですが、それぞれの地域性も考えながら広めていきたいと思っています。

また、「電子図書館の導入」についても検討していますので、ご説明いたします。電子図書館の導入という資料をご覧ください。

「導入の概要」ですが、全校児童・生徒に配布されているタブレットを活用し、子供の読書活動の推進を図り、また、非来館者に向けたデジタル環境での図書館サービス及び視覚障害者等への読書バリアフリーサービスを提供し、本市における市民の読書活動の推進を図るものとなっています。

「具体的な取組・効果等」について説明します。

「①子どもたちが学校や自宅等で気軽に本と触れあえる機会の提供」について、電子図書館を利用する際はIDが必要となりますが、市内の小中学校の全児童・生徒にこのIDを付与することにより、GIGAスクール構想により配布されているタブレットを用いて学校や自宅等で本を読むことができます。「②児童書読み放題パックの導入」です。通常、小説などの電子書籍は2年間若しくは52回の貸出上限があります。また1冊の電子書籍を同時に複数人が借りることができず一人ずつとなります。しかし、今年できたこの「児童書読み放題パック」は、1年契約のものになりますが、子供たちに人気の児童書300冊が無期限かつ同時閲覧可能となります。朝読の時間など利用者が集中する時間帯でも大丈夫です。児童・生徒のみならず、電子図書館のIDを持つ一般の利用者も同時に閲覧できるとても便利なものになっています。一枚めくっていただいて、「③継続的な図書館サービスの提供」です。令和2年度のコロナによる臨時休館など、図書館が開館できなくなった場合でも、電子図書館により本を借りることができるため、図書館サービスを継続して提供できます。「④誰もが本を楽しめる機会の提供」です。読み上げ機能、背景色の変更や文字サイズ変更などアクセシビリティに対応しており、活字の本を読むことが困難な方への読書機会の提供に貢献できます。

以上のことから、導入することで多くのサービスが提供できると考え、今後も引き続き検討していきたいと思っています。

以上、「図書館における取組について」の説明を終わります。

前田晋太郎（市長）

それでは今様々な取組について説明がありましたが、皆さんからご意見やご質問をいただきたいと思っています。いかがでしょうか。はい吉村さん。

吉村邦彦（教育委員）

ご説明ありがとうございます。私も8月に中央図書館にお邪魔したんですが、僕は図書館に行って本を読む習慣はなかったのですが、学生時代から。家内は中央図書館に行って何十冊も、すごい数を借りてきます。たまたま返却についていったときに戦争の特集があってですね、そこで気になってたんで見てたら、乃木ならず自衛隊とか軍隊とか、そこでつながりが全て見れるようにつくられてて、本当に面白くて、僕も1時間ぐらいそこで本を読んでました。

だから学校図書館もそうですけど、地域の方々とか保護者とかそういった方々にも、もっともっと興味を持って欲しいと思います。それと iPad というかタブレットの配信の件は僕もちょっと思ってました。親とか前田市長とか、それから学校の先生とか、それから地域の皆さんとかに、こんな本が面白いよという逆バージョンとかおススメのそういうものも、子供たちに配信したらどうかと思っています。

それからもう一つが、これは現実にはいろいろと議論があると思いますが、学校図書室の地域とか地元への開放をしたらどうかなと思います。どうしても学校自体が中々敷居が高く行きにくい。なおかつ図書室に入ることが地域の方が中々ないと思います。ですけど地域に限って、先ほど登録者という話がありましたけど、こういった方に図書室を開放するというので、学校に対する理解も深まりますし、行事の参加、あと子供たちとのコミュニケーションにもつながるんじゃないかと思っています。親や地域が学校に行くということが大事だと思うので、そのあたりができれば地域としても本に対する興味が湧くのかなと思います。

それからブックル。せっかく良い移動図書館があるので、これをもう少し良い意味で周知できないかなと。どこにいつ止まって、どれぐらいの図書があつてどういう風を使うのかをもっともっとプロモートすれば良いんじゃないかなと思います。

それから研究協議に学校にお邪魔したときにどなたか事務局の方が言われてましたが、コロナで中止になってますけど、音読を学校全体、全ての学校で、下関市として音読を習慣化するというのを復活させるべきではないかなと思います。以上です。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。いろいろとでました。どうでしょうか。私も気になったのがいくつかあつて図書室の地域への開放ですね、地域への開放これは地域からすれば、その先にはコミュニケーションが図れる、行事に参加を促したりできるということでありましたが、基本的にはどうなんですかね、学校への一般の方が入ってくるということの安全性とか、まあ基本的にやっていると思うんですけど、普通に PTA の親とか来ているから。図書室は開けているんだっけ。開放してないんですけど。

戸嶋優子（教育研修課主査）

図書室の開放状況は学校によって異なっていて、利用するときだけ鍵を開ける学校もあれば、終日開いている学校もありますし、司書がいる時は終日開いている学校もあります。

前田晋太郎（市長）

司書さんがいる場合、図書室は一般の方には開放しているのでしょうか。

戸嶋優子（教育研修課主査）

例えば先ほど読書会を紹介したのですが、生徒と保護者の。これは安岡中学校なんですけど、安岡中は毎週火曜日に行くんですけど、火曜日に地域開放されていて、毎週貸し出しの方がいらっしゃいます。地域開放したいということで考えている学校はあります。ただ数の上ではあまり多くはないです。

前田晋太郎（市長）

本の種類がね。子供たちが対象だから、中学校でもどうかなって感じですね。

小田耕一（教育委員）委員

図書室の開放ということですけど、一つの事例として豊北図書館が豊北中学校という学校の中にあつて、もうすでに常時開放している状況で、生徒も使っていますし、中学校の図書もその図書館の中にコーナーのようにしてあるという状況で、子供たちもその貸し出しの業務に携わっていたり、それから授業で使っていたり、それから私かつて豊北中学校に勤務していたんですけど、豊北中学校の生徒が作った、豊北町をなんといいますか皆に見てもらいたいというポスターを作っていたんですけど、そのポスターを小さくしたものを本のしおりにして、豊北図書館の窓口でそれを利用者に渡していたということもありますが、ですから事例としたは開放している図書館がすでにあるということと言えます。

前田晋太郎（市長）

なるほど。やりたいという学校を止めるというルールはなくて独自性に任せている。地域と学校の独自性に任せている状況ですね。

戸嶋優子（教育研修課主査）

はい。相談されたら、お答えはしたりはしていますが、基本的には子供の使用に支障がない限りは地域にも開放することが望ましいということになっております。

前田晋太郎（市長）

わかりました。

児玉典彦（教育長）

今、地域に開放できるかどうか一番左右するのは学校司書さんがそこに在中するかどうかです。学校司書がない時に開放するという事は、教職員の誰かが対応しなければならないので。安岡中のように曜日によっては開放しますというのは良い例だと思います。毎日開放しようと思ったら、全部の学校に学校司書を配置する必要があります。

前田晋太郎（市長）

毎日司書がいる。

児玉典彦（教育長）

はい。これはとても現実的ではありません。

前田晋太郎（市長）

現実的に吉村さんもそこまで求めているわけではなくて、固定曜日化してそれが波及してくるといふか、この議論としてはですね。その先に何かコミュニケーションの変化が生まれるというかですね。

吉村邦彦（教育委員）

今の件で言いますと地域とか大人と学校を通して、本を通して、コミュニケーションをとれるような環境になれば、もっと読書の街・下関って子供だけではなくて、大人も読書とか本に触れられるようなそういう環境にしていければいいのかなと。毎日とかそういうことではなくて、そういう環境をつくるということが大事なのかなと思います。ですから司書さんがいらっしゃるその曜日、その時間だけでもいいと思うんですけど、その時間に司書がいて学校の図書室を地域の皆さんに開放してまずってことを学校がいかにその校区とか地域に伝えられるかが課題です。

前田晋太郎（市長）

そうですね。ものすごく大事なことだと思います。地域に対する行政側からの、何ていうのかな、行政サービスの一環というか、うまく言えないですけど、良い話ではないかと思えます。

じゃああれですね。望んでいる学校には前向きにそういう先進例を出して、総合教育会議の例を出して調整してあげて欲しいなと思えます。

戸嶋優子（教育研修課主査）

はい、わかりました。

前田晋太郎（市長）

そしてブックルの周知を少し広げたらという提案がありましたが、今の仕様は週1回ですか。地域を回ってますよね。決めた地域を。説明できますか今、ブックルの稼働状況。

江原理恵（中央図書館長）

ブックルは旧市内なのですが、26ステーションを②週間に1回巡回しています。本の貸し出しが2週間に以内に返却しなくてはいけなくて、同じように巡回して回収と新しい貸し出しをしております。

前田晋太郎（市長）

ということは1日3、4か所ぐらい何時間をそこで滞在しているような形ですか。

江原理恵（中央図書館長）

そうですね。午前・午後の2ルートで出ていきます。出勤しない日がありますので、その日は親子ふれあい広場にいたり、学校に出勤したりしています。人気のあるところは1時間以上も滞在しますし、人が少ないところは20分程度となります。

前田晋太郎（市長）

少なかったら次に行くんですね。

江原理恵（中央図書館長）

時間帯は決まっています。年度ごとに来年度は少なめにしようとか。それを予定されている方が来られるので、勝手に早めたり遅めたりはしません。

前田晋太郎（市長）

そうですね。なるほど。

ということはそういうルールがきっちりされているから存在を知ってもらうということですかね。我々がやることとすれば。今広報はどうでしたっけ。日常的に広報はしているわけではなくて、何を通じてその26か所を回っている情報を出しているんですかね。公民館とか行ったら置いてあるとかそんな感じですか。

江原理恵（中央図書館長）

ホームページに掲載したり、巡回先の施設に置いてもらったりしています。

前田晋太郎（市長）

今度何か特集をしますかね、皆で。教育委員会を超えて。下関市の広報を使って1回。要はですね、知ってない方がたくさんいるからね。知って悪くはないと思いますし、こういう話は。やればやるほどいいんですよこれは。

吉村邦彦（教育委員）

読書の街・下関っていうことを、僕これ市長からテーマいただいて思ったのが、本気度について、これをどのくらいまでやるのかっていうことを、やっぱりちゃんと市民の皆さんにもお伝えしなきゃいけないと思うんですよ。そうすると今ブックルが市内26か所を巡回しているということも、ごめんなさい、僕、26か所回っているということも存じあげなかったんですが、ホームページで見て初めてそうだったという感じだったんですね。だから多くの皆さんがそういう風に思っていて、近くに来るんだけど気が付いてない。

前田晋太郎（市長）

おっしゃるとおりだと思います。どこで最寄り借りにいけるんだらう自分だったら。西大坪だったら駅前、どこですか。下関駅の近くだったらどこに行くんですね。

江原理恵（中央図書館長）

一番近いところでひかり童夢ではないかと。

前田晋太郎（市長）

旧図書館の所の。

吉村邦彦（教育委員）

旧市内を回られて一番近いところでひかり童夢ですか。

前田晋太郎（市長）

僕の家からしたらね。難しい質問しているんですよ。

吉村邦彦（教育委員）

結構遠いんですね。

八角誠（教育部次長）

旧市内の下関はですね、中央図書館、彦島図書館がある関係であまりポイントが多くないです。どちらかというと旧下関市内でも支所管区の方がポイントが多くて、今度、安岡複合施設に北部図書館が入りますが、安岡、勝山あたりは図書館施設がありませんから、あの辺にたくさんポイントがあつてという状況になってます。

前田晋太郎（市長）

補完的な見方。

八角誠（教育部次長）

そうです。固定的な館が置けない代わりにそちらの方に巡回することが多くなっている。それから歴史的には1市4町が合併する前には広域事務組合で、1市4町を合わせ巡回していた時代があったんですけど、残念ながら組合としての事業が終了してしまって今は、合併する前の下関エリアの中でも支所管区エリアを厚めに巡回しているという状況です。

前田晋太郎（市長）

吉村さん、我々は中央図書館でと。

藤井悦子（教育委員）

私もブックルは走っているのは見たことがあるんですけど実際止まっているところは見たことがなくて、よく何とかのパン屋など音楽を鳴らしながら来ますよね。来てるとわかるように、何か歩いている人がここに音楽が鳴っているからそろそろ来るとかわかるような形にするとかがいいんじゃないかと思うんですが、黙って行くんですか。音がしてますか。私知らなくて。

江原理恵（中央図書館長）

音楽は流してます。ただ場所によってはうるさいと言われる方がいらっしゃるのでそこは遠慮しているところはあります。

前田晋太郎（市長）

本だし。音はちょっと似合わないかな。

佐々木猛（教育委員）

まずは様々な取組をされていたのにびっくりしました。司書の方々が遊び心を加えた中でいかに読書のきっかけを作るのかということされていたということに本当に驚きというか、知識不足で申し訳なかったのですが、すばらしいなと思いました。

私自身「読書の街・下関」今回のテーマを聞いたときに、じゃあ自分が大人になってからどれだけ本を読んだのか、図書館に行ったのか。本を学校の図書室に行って本を開いたのかって考えた時に、我が子が小学校の時に、読み聞かせボランティアを何日かさせてもらった事があって、その時に、どの本かいろいろ調べたりするときに、その時一生懸命本を読んだりとか、図書ボランティアの方々に話し聞いたりとかして、本に対して興味があったりとか、その時すごく読んだなっていう記憶があったんですね。これをもっと図書ボランティアの方、ほとんどの小学校、中学校であるかと思うんですけど、司書の方含めて人数が少ない中で一生懸命日々やられているところを、各学校の学校運営協議会の方々を通じて、地域の方々にいかに入っていただけるかということをやっていくと、地域の方も自分が活動するにあたり、本を読むことにもつながってこないのかなってなるとちょうど中間層がないのかもしれないですけども、地域の方々のお手伝いいただける方も本に興味を持っていただけのかなと。それによって読み聞かせの時に参加した時のまずの印象は、子供たちは興味津々として参加されてたのを僕の記憶があって、そのあとのコミュニケーションというものも非常にとれるようになってきたんですね。ってなるとこれからの地域連携ではないですけど、それにももっとつながってくるのかな。って考えた時に学運協だとか、今各地区にあるまちづくり協議会なんかで、図書ボランティアだとか読み聞かせ講座だとかそういうところをもっと利用して、出前講座とか本の修復とかやられてましたよね。オリジナル帯づくりとかもできるのかなと。先ほどお話がありましたけど、興味がある本、子供たちがよく読んでいる本はよく破れてですね、逆に僕たちはこれが子供たちが好きな本なんだっていうことで、目立つ位置に置いたりして、また戸嶋さんのお話を聞いて、どういう本の並べ方をすれば子供たちが興味を湧くのかっていうのをいろいろ教えていただきながら、図書ボランティアを司書の方とやった覚えがありまして、ぜひそういう風な形で、もっとボランティアの方を通じて、図書ボランティアの増員を地域の方々と通じてやればもっと多くの方が大人も子供も読書に触れあえるんじゃないかなという風に、今回のテーマを聞いて自分で思っていました。

前田晋太郎（市長）

はい。他はよろしいですか。

吉村邦彦（教育委員）

先ほど江原館長からお話がありました電子図書館の導入、これは早急に行っていくべきではないかなと思います。今、市の方も市長が中心となって手話をやられている中で、音声図書と言ったこともコロナ禍では出てきていましたんで、そこは今これを見ると、山口県内の自治体はほとんど導入されて、下関は遅れをとっている気がすると思います。

前田晋太郎（市長）

これ先ほど説明ありましたが、実際「読み放題パック」を入れた感じですね、2番は。今、実際どれくらいの規模でやってるんですけど。中央図書館では1個やってますよね。だから電子図書をどこまでやってるかっていうのをさっき説明があったと思うけどもう少し。

江原理恵（中央図書館長）

下関市内の図書館では電子図書館は全然入ってないです。

前田晋太郎（市長）

ゼロ。

これは市長査定で取り上げなかった記憶がある。私が悪いですね。確か2年ぐらい前に市長査定にあがってこなかったかな。

徳王丸俊昭（教育部長）

去年の市長査定でなくなりました。

前田晋太郎（市長）

そうですね。僕ですね。すみません。

何もかもあがってくるやつを受けるわけにはいかないんです。相当な、そういうことだなんていう、今回の学校司書みたいだね。

どこか目標をつけて、やるんだったらせつかく総合教育会議で議題も出たし、どこか目標つけてやるんだったら、来年取り上げていいかなと。

藤井悦子（教育委員）

すみません、電子図書ですかね、確かにメリットがたくさんあると思うのですが、私からしますとやはり低学年のとき、小学校、中学校の時はスマホで見る、タブレットで見るとか、目が悪くなりますよね。ブルーライトが出てますから。そして本というのは、指を使って一つ一つめくる。それが低学年の時は大事かなと思います。

確かに電子書籍にすると物は重たくもないし、いつでも見られるし、場所をとらない。高校生ぐらいになったら良いと思うんですが、子供の時はやはりそういうのは使わずにしっかりと紙媒体で、子供たちに教育していただけたらどうかなと思います。

前田晋太郎（市長）

総合教育会議ではじめて意見が割れましたよね。

私も今言われて思い出したわけじゃないんですけど、子供たちにはどうかなというのがやっぱりあるんです。すごく目が悪くなってしまいうってというのは。うちの子もどんどん目が順調に悪くなっていったですね。どうなんですかね。先に中央図書館でやってみますか。大人対象で。どこから入りますかね。

江原理恵（中央図書館長）

電子図書館を中央図書館で入れると、各地域館、市民の皆さんが利用できますので、どこの図書館かを問わず地域で利用は可能だと思います。

前田晋太郎（市長）

自分の持ってる端末に落とすことができるってことね。

江原理恵（中央図書館長）

はい。

前田晋太郎（市長）

前回どういふスキームで市長査定あげてきましたっけ。

江原理恵（中央図書館長）

去年は、1千万円で積算しております。

前田晋太郎（市長）

1千万円は大きいね。それは、本は無限にあるし、市民もどれくらいダウンロードするかわからないでしょ。そこでどう数と数を結び合わせた金額の積み上げになるわけですか。

江原理恵（中央図書館長）

去年は児童書読み放題がなかったの、ライセンスの有期限のものと無期限のものを組み合わせて積算しました。無期限というものは、買い切りになりますので、1回買うとこちらのものになりますので、何回利用しようがずっと使えます。専門書とかが多いので、一般的にはなじまないかなと思います。有期限のものは先ほど説明したとおり、最長2年間とか、貸し出しが52回という限度があります。小説物とかはありますが、最新刊があるわけではないです。

前田晋太郎（市長）

今日は時間も限られてますので、電子図書については今日1つテーマになりましたから議論していきましょうかね。時間はまだ少しありますから。財政に要求しないとイケないんですかね。間に合わないですか。もう予算要求にあげているのですか。

八角誠（教育部次長）

財政には要求をあげています。去年の整理としては、どのくらいいいとか、誰をターゲットに導入するとかやっぱり決まらなかったの、それも含めて踏み込むには時期尚早ではないかというのが去年の判断です。今年については新たにこども読み放題パックというものがでてきたのもありまして、ターゲットを絞り込んで、こういうふうな形で徐々に導入できないかという形で今は要求段階ということです。

前田晋太郎（市長）

1千万円は大きいかな。いきなり。もう少し削ることができますか。

江原理恵（中央図書館長）

今回は半分に下げております。

前田晋太郎（市長）

これは阿吽の呼吸ですね。

児玉典彦（教育長）

私も藤井委員が言われたように低学年の子供については紙の方がいいだろうと考えております。だからそれは学校のタブレットからそこにアクセスできるってことですよね。それはそれとして置いておいても実際に夏休みや臨時休校の際にはとても有効だと思います。基本的には大人向けの書籍を中心に考えてもいいかなと思っています。内容については協議が必要ではないでしょうか。

前田晋太郎（市長）

学校に來れなくなってしまう環境下では素晴らしい力を発揮すると思うんですよね。夏休みとか課題として渡していくのはいいかもしれないし。そういうことも考えているとは思いますが、議論を進めてもらいましょうか。

ほかに何かありますか。いろいろ出ましたけど、やっぱり読書の街・下関っていうことをさらっと言ってもこれは効果がなくて、こういった事をやる、目標はここだということで、これは教育委員会だけではなくて下関市全体です打出すっていうのは良い時期がくればやってもいいんじゃないかというのは今日感じました。教育長が自他ともに認める本がお好きな方で、それだけ博識でいらっやいますね。そういう意味でも教育が少しリードしてやっていただけるといいのかなと思います。令和5年は読書の年元年でもいいですよ。

児玉典彦（教育長）

はい、ありがとうございます。これは先ほど学校の読書活動の折に説明した戸嶋が読書の街・下関を打ち出しました。始まったばかりですけど少し議論をしながら来年度あたりから教育委員会として前に出て、そのあと自然体でいけたらと私自身は考えております。

前田晋太郎（市長）

私は本を読むのは頭を休めることに使うんですね。すごく頭がクールダウンされるというか違う世界に連れていってくれるというような感じ。だから休みが最近本当に少なく、コロナが落ち着いてから土日本当に休みがなくて、最近私服に着替えた記憶が3カ月ないんです。だから私服になった日は料理するのが好きだから、スーパーに食材を探しに行くのと本屋に寄る。これが僕の休みの過ごし方なんですけど、全くできてないですね、この3カ月は。

児玉典彦（教育長）

市長さんは、どこの本屋に。

前田晋太郎（市長）

本当はシーモールのくまざわ書店がいいんだけど、シーモールは中々行くのが大変なんです。顔さすとかですね、家族が嫌がるんですよ。そうするとスーパーのゆめマートの本屋さんに行くことが多いですね。お肉はゆめマートが結構あるんですよ。

（宮脇）

前田晋太郎（市長）

そうそう宮脇書店。

児玉典彦（教育長）

宮脇はあまり目立ちませんが、本をいろいろと置いてあるので。

前田晋太郎（市長）

数は少ないですけど、なんかあの空間が落ち着くようになってきたんです、最近。この間買ったのは建築士2級の参考書とかを買ったんですけど、おもしろいですよ、読んでると。

とにかく令和5年度に向けて、最初は小出しでもいいって思うんですよ。今日出たトピックスを1つずつクリアしていくということですよ。だからまずはブックルの例えば広報を強めに出してみるとか。そういうのをやっておいて将来的に本ってやっぱり大事よね。下関って本を読む人たち増やしていこうねっていうのを大々的に打ち出すっていうのは。これ1、2カ月で準備できるものじゃありませんから、ちょっと課題として。今日はそういう意味ではこの会議は有意義なんじゃないかと思うんですけど、いかがでしょうか。

それでは今日はこの1件ということでありませう。協議事項は以上です。

【その他】

前田晋太郎（市長）

その他。恒例のその他に移りたいと思います。10分ほど時間がありますから、何か自由意見がありましたら、どうぞ。

吉村邦彦（教育委員）

いくつかあるんですけど、簡単に説明させていただきます。先ほどの小田委員から図書館、公民館、学校の融合という話がありましたけど、私は学校と公民館の機能を融合させればいいんじゃないかなと思います。提案レベルですが、市内の公民館も老朽化が激しくてですね、公費を使うのであれば学校設備の充実を図って、学校と公民館の同時利用を進めるべきと思ってます。これは地域の方が敷居の高い学校に足を運べることとか、メリットとしては公民館以上に非常にいい設備があります。空き教室の有効利用とか地域住民の学校の理解とか地域の皆さんが学校の活動に参加いただくと子供と地域のコミュニケーションとかコミュニティスクールの推進とかができるのではないかと思います。マイナス要因としては公民館をなくすという地域の反対。経費の分割方法の煩雑化、事業とのバッテ

イングがあると思います。後は公民館で働いてらっしゃる方が学校にいらっしゃるということで、先生の働き方改革につながっていくのではないかと感じます。私の私見というか意見の1つ目です。

次は学校の設備の見直しをご検討いただきたいなと思ってます。中学校は部活があるんで設備があるんですが、小学校は冷水器の設備がありません。統廃合とか校区の拡大によって、夏の学校訪問の際に子供たちから要望がありました。通学距離が長い、遠いということで、今気温も尋常じゃない時代です。子供たちが学校に行くのに水筒が登校だけで空になるということで、低学年の子が巨大な水筒をもっていかなければならないですし、帰りの補給もできません。ということで、冷水器の設置ができればと、これも予算の関係があるかもしれないですが、できればいいなと思います。我々のころは水道水をガブ飲みしてたんだと思うんですが、中々今、そういうのをしている子供も少ないと思いますし、保護者の方からもそういう声がありますので、検討すべきではないかと思えます。

3つ目です。10月14日に第一幼稚園に研究協議でお邪魔しました。来年度閉園が決まっているということで、そのあと何になるか不透明なんですけど、そこにマンションが建ったりするよりも、あの中心市街地にあれだけの素晴らしい緑の環境があります。やはりマンション等が建つことによって最高の環境がいったん破壊されると2度と元に戻すことはできないと思います。

山の田の第五幼稚園は一般企業さんが買い取られて、環境をそのまま維持して地域の皆さんもここにマンションが建たなくてよかったとの声が聞かれています。ですから、いろいろなことがあると思いますし、全部の場所ではないとは思いますが、その地域地域で統廃合によって廃園、廃校になった施設の活用の仕方、それから民間への払い下げの場合にどのようにするかを是非ご検討いただければと思います。

最後に、先日長崎で教育委員の勉強会がありました。その時に南海トラフ地震で、高知県の方が発表されたんですけど、高知は南海トラフで34mの津波が来る想定になっています。年間に10回以上、自分は自分で守る、大切な人を守るっていうことをテーマに避難訓練、防災訓練、災害訓練を実施しています。下関は元々災害が少なく安全神話みたいところがあるんですけど、それも過去のことで、子供たちもずっとこの安全な下関に住んでいるとは限りません。ですから、生きるとか生き抜くということのすべを教えることが重要だと思います。自分で自分を守る術とか生き抜く力、避難訓練、ハザードマップ、災害の時にどう行動すべきなのか。それから下関であればしまちアプリの活用とか応急手当、家族を守ること、連絡手段、あと学校との連絡方法とかをどういう風にするのかということをもっともっと具体的に子供たちにきちんと教育していくべきではないかと思えます。

以上です。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。どれも大切なことですね。時間がありますので私の方から。公民館と部分的に融合していくのはすごくいいんじゃないかと思っていて、すでにやっている要素も地域によってはあるなと思います。安全性だとかいうけれどもやれているところはすでにあって、土日夜間になると難しいことになるかもしれませんが、問題は公民館も公民館法ですよ。公民館の設置根拠は法律ですか。

藤井智（教育部参事（生涯学習課長））

社会教育法です。

前田晋太郎（市長）

社会教育法。だから法律の中でルールがあって、最終的に吉村さんが言ってるような公民館を学校の中に全部入れてしまって、公民館をなくすというのは難しいのかなと。部分的にできることからやっていって徐々に、地域によってはね本当に公民館が必要ないとか維持できない。じゃあそれをコミュニティセンターに切り替えました。だからそれで行政のなんていうんですかコストは削減されて、学校の中で地域と子供たちの中でできることが増えてコミュニケーションがよくなりました。こういう形だったらいいのかなってこれを読んで思えますね。まだまだ凸と凹をはめることはできると思います。

吉村邦彦（教育委員）

先ほど教育委員が集まって雑談で話したんです。最後の防災訓練のところとつながるんですけど、下関市も南海トラフで3mから4m、低いところでは津波が来ると予想があります。そうなったときに公民館が避難場所だったとしたら、西部公民館だと海拔1.7mなんですよ。

前田晋太郎（市長）

まずやられる。

吉村邦彦（教育委員）

逆に学校は多くが高台にあるんですけど、学校には避難物資だとかそういうものが保管されてない。でも公民館にはある。そのあたりもあるかなと思います。その前にどう逃げるのか。

前田晋太郎（市長）

これは今後の総合教育会議の材料にしてもいいかもしれないですね。防災と連携して。防災がもっている情報なんで。わからないところがたくさんあるでしょ。これは1つ良い提案だと思います。それと給水機は私が文洋中在校時にはあったんです。

吉村邦彦（教育委員）

中学校は部活があるから、あるんです。

前田晋太郎（市長）

あれは1機いくらぐらいするんですかね。

木下満明（学校教育専門監）

10万円程度です。

前田晋太郎（市長）

10万円ぐらい。えいやでできなくもないんですね。

佐々木猛（教育委員）

工賃がかかります。水道管をはわせたり。

前田晋太郎（市長）

そうか。位置によってはね。これは確かになって感じがしますが。うちも毎日水筒を持って行っていますよ。水筒を持っていくのもいいんですけど、4km歩いている子もいるわけですからね。どうですか皆さん給水機。お金以外に支障はありますか。

平本万佐生（学校支援課長）

学校支援課です。お金以外の支障はございません。今、給水機を設置しているところは水道管から直接管をつないでくことができる場所です。しかし、学校の水道の多くは、1回高架水槽に上にあげて、上からの水圧で、トイレとかの水は流すようにしています。

前田晋太郎（市長）

文洋の子は飲んじゃいけないですよ。

藤井悦子（教育委員）

なぜですか。

前田晋太郎（市長）

危険だから。そうですね。

平本万佐生（学校支援課長）

土日で塩素がとんでしまうので、月曜日の水とかはですね塩素が切れています。

前田晋太郎（市長）

あんまりおすすめでできない。大変申し訳ないんですけど。中学校はあるんですか。

平本万佐生（学校支援課長）

ほとんどはPTAからの寄附でやっております。学校支援課が自ら設置したことはないようです。

前田晋太郎（市長）

今まで。

平本万佐生（学校支援課長）

はい。

前田晋太郎（市長）

これもあれですね。あと4番は吉村さん。これはいろいろと考えてます。マンションではないから。

吉村邦彦（教育委員）

たまたまこういう話を聞いてあんなにいいロケーションが次々高層ビルが建つんだったらあの地域として損失だな、下関市として損失だなと思ったん。全部じゃないですけど、そういう場所を特定してこの場所はっていうことで、いろいろ市の方もお金の出入りがあるにせよ考えられたら良いのかなと感じたので。

前田晋太郎（市長）

吉村さんからご提案いただきましたけど、時間もまいりましたんで今日はここまでにしたいと思いますが、いつも良いご意見をいただいてありがとうございます。

私も市長をお預かりして6年になりますけど、教育には特に力を入れてきたつもりです。自分の子供がいるからではなくて、やっぱりなんていうんですか子供の存在って我々の宝とかそれ以上に街のバロメーターというか基礎ですよ。

k a n a n o w a ご存じだと思っんですけど、代表の前田亜紀さんが言うんですけど、私たちのこれからの未来はこの子らにかかっているっていうんです。でね、どんだけ我々が政治と行政をがんばっても今いる子供たちがこの街に失望して出ていけばこの街は終わってしまいますから下関は。そうじゃなくていかにこの街が好きで、1回は出て帰ってきたい、帰ってくることを決心したいということを感じさせることができるかどうか、それだけで下関の未来は明るいんですね。それぐらいのことを考えているので、すごく教育会議の課せられた使命は大きいし、この皆さんの使命は大きいんですが全て背負わせているわけではないんで、これからも前向きにご意見をいただいたり、ご助言いただいたりよろしく願いできればと思います。

今日はどうもありがとうございました。以上です。

（ありがとうございました。）

【閉会の宣告】

徳王丸俊昭（教育部長）

ありがとうございました。以上をもちまして令和4年度第2回下関市総合教育会議を終了いたします。皆さま大変お疲れ様でした。